

## 『グローバル天理』第3号掲載論文要旨

### 井上 昭夫「巻頭言 私立大学存続の危機と天理大学」

入学志願者数の減少によって危機的な状況にある私立大学がある。しかし、逆にそれが増加している私立大学もあるのだから、少子化だけが減少の原因とは言えない。私立大学は独自性を打ち出し、教育・研究の改善を迫り続けていかなければ生き残れない。今や私学は生存競争から生存戦争の時代に入っている。

### 太田 登・中井 精一「天理教原典とやまとことば(3) 原典とその発音 [1]—母音の交替現象」

天理教の原典の成立したおぢば周辺では、イとエ、ウとオのそれぞれのペアに母音交替が観察される。ここでは原典「おふでさき」の中にもこれらの母音交替が現れることを見る。

### 笹田 勝之「天理教における悟りの構造について—他宗教との比較を通して—(3) 序章(続)『おふでさき』における用語「さとり」

「おふでさき」の中で「さとり」がどのように用いられているかを見る。そこでは、神の話は「さとりとる」しかなく、心が澄まないと「さとりつく」ことができないと言われている。また、「さとり」とは人の目に見えない、まだ実現されていないことを「知ること」だとも言われているのではないか。

### 堀内 みどり「天理異文化伝道の諸相(3) 天理教のコンゴ伝道 [2]—コンゴ共和国【1】」

天理教の布教伝道地となったコンゴとはどのような所なのか。ここでは天理教の教会のあるブラザビルを首都とする、コンゴ共和国の歴史、地理、言語、民族、宗教を概観する。さらにコンゴ王国の成立から近代ヨーロッパによる支配が始まるまでを概観する。

### 金子 昭「天理経営学—その歴史・哲学・展望—(3) 歴史編2 天理教者の経営観 [2]」

戦後7つの会社を経営し、天理教の初代の教会長でもあった山村外吉の生涯を見る。そして、山村の信仰に基づく事業観を彼の経歴と著書から探る。山村は経営者として、倒産という悲劇的な体験をする。そこから彼はどのような神の思し召しを悟ったのだろうか。

### 佐藤 孝則「エコロジーの思想と実践(3) 古代エジプト文明と資源循環システム」

エジプト文明はなぜ長期間存続できたのか。それは、ナイル川とその水を利用した独特の「貯溜式灌漑」にあると言われる。また、エジプトの一般住宅の素材となる日干しレンガは、リサイクル、リユーズの可能なものであった。古代エジプトでは循環型社会が実現していたといえる。

### 金子 珠理「ジェンダー・女性学情報(3) 人口にまつわる神話」

人口をめぐる様々な神話—人口過剰は南の貧困と環境悪化の原因だとするもの；前近代社会には自然にまかせた生殖しかなかったという考え；イスラームでは避妊はない等—これらの神話について検討を加える。

### 小林 正佳「芸術・癒し・宗教(3) 踊ること、動くこと」

踊ることが体と心の健康によいことを深く感じてきた。それは踊ることを通して一定の経路に導かれてゆく体の在り方とそれに結ぶ心の在り方があるという実感が、一つの健やかさに通じている。他の踊る人々に深いところで共通する世界が生み出されていると感じられる。民俗舞踏の場合は、このことが存在理由の根幹に組み込まれているように思われる。

### 小滝 透「天理比較神秘論への試み(3) 神話[2]」

天理教の教祖は、封建体制と近代日本の二つを相手に対峙した。天理教の神話体系としての「元の理」が、それぞれを支える思想・宗教と対峙しているからだ。それは、「陽気暮らし」の実現という神の意志と、人間の存在意義を明らかにし、個人から始まる世界・人類を救済対象としている。その際に必須なのは高揚感(勇み)であり、この体験こそが神秘主義の温床であり、その生育の場である。

## アデル M. スタン「共通の主張を求めてー世俗的フェミニズム・宗教的フェミニズム(2) 宗教と世俗を繋ぐ」

私は美少女コンテストの舞台で、将来修道女になるから子供は作らないと答え、リトル・ミス・カータレットになり損ねた。それが自分自身の宗教的フェミニズムの出発点だった。今は世俗的フェミニストと宗教的フェミニストの対立を越えて、両者が協議事項の枠組みを作る時だ。

## 塩沢 千秋「脳死・臓器移植ーカナダ通信(3) Living Donor: 命を削る」

臓器提供者には、Cadaveric Donor（脳死体臓器提供者）と Living Donor（生体臓器提供者）がある。今回はカナダにおける Living Donor の3つの例を取り上げる（妹から姉へと、息子から父への腎臓移植、そして二人の兄弟から姪への肺移植）。Living Donor は生死の判定に曖昧さのない点で Cadaveric Donor とは大きく異なっている。臓器移植自体の問題点を考える。

## 深川 治道「エコロジカル インタビュー(3) 環境マネジメントシステムと大学[3]」

法政大学は一つの大学院棟という狭い適用範囲で ISO14001 の認証取得をしているが、これは同大学の「グリーンユニバーシティ構想」実現という大きな目標の第一歩となるものだ。それまで大学として環境問題への取組みが遅れていたという認識のもとに始まった同大学の、ISO14001 認証取得までの道のりについて実務担当者から詳しく話を聞いた。

## 上杉 武夫「都市の再生に向けてーアメリカ通信(3) チャタヌーガとクリチバ」

現在最もサステイナブルな町として脚光を浴びているチャタヌーガ市とクリチバ市に焦点を当てる。米国テネシー州にあるチャタヌーガ市はかつて全米で最悪の大気汚染の町というレッテルを米政府から貼られていた。しかし、1994年には全米で最も住みやすい町の一つになるまでに再生している。一方、ブラジルのパラナ州の首都クリチバ市は、自然との共生を都市計画の軸に置いて発展してきた農業と工業が一体化した町だ。この両者を比較し共通点を探る。

小椋 博 「宗教・スポーツ・賭け(3) 「ツキ」と実カースポーツにおける偶然と必然」

「ツキ」はスポーツの世界では実力の練磨と並んで最も重要な要素だ。しかし、「ツキも実力のうち」という言葉が示すように、それは実力を蓄えた者が「ツキ」の恩恵を被ることが許されるということだ。